



No. '22-1

(No.108)

Jan. 2022

ISGG NEWSLETTER

伊東市善意通訳の会

C O N T E N T S

1. スイスでのおもてなし	会長 稲葉 尚子	2
2. 鎌倉殿とわがまち伊東	会員 菊池 善次郎	4
3. お正月料理	副会長 曾我 廣子	9
4. 寅年について	会員 小西 恒男	11
5. 昔のこと	会員 石田 泰嗣	15
【事務局便り】		16
【編集後記】		17



忘年会で新任の ALT を迎えて

スイスでのおもてなし



皆さま、

会長 稲葉 尚子

明けましておめでとうございます。

コロナのオミクロン株の広がりが凄まじく、ISGG の活動もほとんどできない状態が続いています。昨年のリベンジで 1 月 28 日に英語講演会を予定しましたが、またしてもコロナで開催が出来なくなってしまいました。今のところコロナの直接被害に遭った方が ISGG の中にいないことを幸いに思いますが、どうかくれぐれもお気をつけてお過ごしください。

今回は「おもてなしの心」ということでスイスでの思い出を書いてみようと思います。

私が 1978 年から 1984 年まで住んでいたドイツのフライブルクは、フランスのコールマルまでも、スイスのバーゼルまでも車で 30 分位で行ける、ドイツ南西部に位置しています。

ですから、バーゼルまでは、仕事でも日常的に行き来していましたが、スイスアルプスとなるとまた別で、憧れの観光地でした。

話は変わりますが、ドイツで充分ピアノを練習できる部屋を見つけることは至難の業でした。

私も引っ越しを重ねた末、最後は郊外に庭付きの一軒家を音楽仲間と一緒に借りることにりましたが、日本人の K 子ちゃんは初めから山の中の村に部屋を借り、ドイツで車の免許を取る決心をしました。

ドイツには車の教習所というものがなく、初めから路上で、「さあ、走って！」と言われた

そうで、びっくりの連続でしたが、何とか無事免許をもらうことが出来、私に、「試運転したいけれど、スイスまで付き合ってくれない？」と言ってきました。

「免許取り立て初心者」の怖さを全く知らない私は喜んでスイスドライブにお付き合いすることにしました。三日間位の予定で出かけるとフライブルクの知り合いに言い置いて、出発。天気も良く、スイスアルプスを眺めながらのドライブは快適で、ルツェルン、ツェルマット、ミューレン等をめぐり、登山鉄道なども利用した旅は私がいままでに経験した旅行のなかでもトップと言えるほど素晴らしいものでした。



アイガー独り占め



そろそろフライブルクに帰ろうと思いながら歩いていたら、農家の家先に「部屋が空いています」という看板を見つけました。庭で農作業をしていたおばさんに、「今夜泊まりますか？」と聞くと、ニコニコして、「どうぞどうぞ」と部屋に案内してくれました。おばさんのドイツ語はきっとドイツ人でも聞き取るのが難しいだろうと思われるスイス農家の方言で、ほとんど言っていることは分かりませんでしたが、歓迎して、もてなしてくれようとしている気持ちはよくわかりました。家族のネコちゃんまで紹介して、自慢の牛からとれる牛乳を出してくれたり、農家の離れにあるチーズを作るところに連れて行って説明してくれたり。翌朝には美味しいチーズと自家製のパンがでてきて、「おいしい！」という喜んで、チーズをいっぱいお土産に持たせてくれました。

この旅はスイスの美しい景色も素晴らしかった
のですが、40年経って思い出すのは素朴な
農家のおばさんのおもてなしです。

ISGG も外国からのお客さんにそういう思い出を
持ってもらえたらうれしいなあと思います。

余談ですが、予定日を過ぎても帰ってこない
私たちを心配して「初心者で運転で出かけて



民泊の農家で

帰ってこないから、搜索願を出すところだった！」と叱られました。当時はケータイなど
ありませんから、公衆電話から連絡すればよかったのですが、それが思いつかないほどス
イスの景観にも人情にも夢中になっていました。

鎌倉殿とわがまち伊東



会員 菊池善次郎

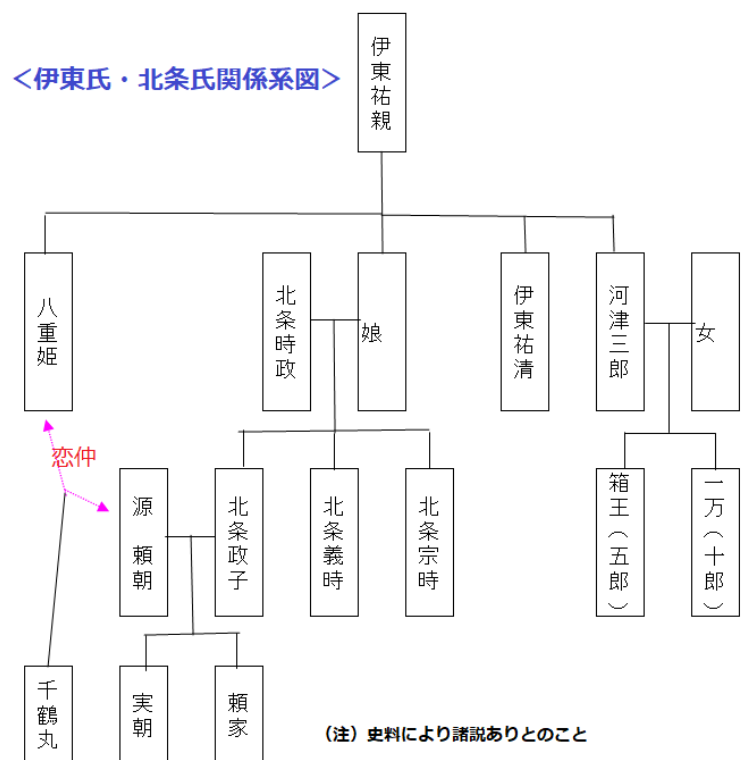
「サイタ、サイタ、・・・」と聞けば桜の花が野に咲く花のことかと昔は思ったものです。
近頃の「サイタ、サイタ（最多、最多）」はコロナ感染者数のことが殆どです。世界中のコ
ロナ禍が始まってもう2年余り。日本はその第6波真っ只中です。憂鬱な毎日です。不安
を感じる毎日です。私たちの活動も著しく制限されています。

そんな中、コロナに関係ない郷土の歴史物語など思いをはせてみるのも精神的良薬かも
と筆をとりました。

1 月初め今年のNHK大河ドラマ“鎌倉殿の13人”が始まりました。初回から源頼朝、

伊東祐親^{すけちか}、北条時政、北条義時、北条政子、八重姫、千鶴丸^{ちづるまる}、北条宗時などなど、伊豆人にとって馴染み深い歴史上の面々が紹介されました。ドラマは伊豆で流人の生活を送る源頼朝を、中伊豆（韮山）を拠点とする豪族北条氏が助太刀のもと源氏の再興を図るところから始まり、その後頼朝が鎌倉幕府を開き武家政権が始まり、2代（頼家）、3代（実朝）と続くけれど、結局、頼朝以外は執権政治という形で実質的に政治の実権は北条氏が握り150年もの長き間日本の政治のトップに立つという、その前半の物語だということです。北条氏発祥の地伊豆の国市（韮山）は“鎌倉殿の13人”の開幕に燃えています。私も三谷幸喜氏脚本によるこのドラマ、どんな展開になっていくのか楽しみです。

私、6年ほど前まで「善意通訳の会」と併せ「伊東自然歴史案内人会」の会員でもありました。案内人資格をとるため2年間研修を受けましたが、その時伊東の歴史についていろいろ教えてもらったり勉強したりしました。伊東の歴史にはいろいろありますがやはり“鎌倉殿の13人”の初回で紹介された伊東祐親や源頼朝の史跡/物語が多く残っています。当然ながら



ら当地伊東の豪族だった伊東祐親に関係する話は多い。そして源頼朝については彼が伊豆への流罪の最初の5年間伊東祐親の館に住んでいたことからいろいろな物語が残っています。特に伊東祐親^{すけちか}の娘「八重姫」との恋、そして「千鶴丸^{ちづるまる}」という子供までできてしまったこと、そのことに激怒した伊東祐親が千鶴丸を殺害、頼朝の命まで狙ったことなど大き

な事件として語られています。結局頼朝は北条氏の館に難を逃れ、伊東と葦山（蛭ヶ小島）で通算 20 年余り過ごしたことになります。

皆さん既に知っている場所ばかりですが、案内人研修の時の資料から伊東祐親/源頼朝にかかわる主な案内スポットを並べると、

- * 伊東祐親の墓・・・物見塚公園内（伊東市役所近く）
- * 伊東祐親像・・・物見塚公園内
- * 物見塚公園・・・伊東祐親の館跡
- * 音無神社・・・頼朝と八重姫のデートの場所
- * 最誓寺さいせいじ・・・千鶴丸の菩提を弔った寺
- * 東林寺・・・伊東家の菩提寺
- * 日暮八幡神社・・・源頼朝が八重姫に会う為に日暮れを待った神社
- * 稚児ヶ淵・・・千鶴丸が殺害されたところ。松川上流
- * 産毛石・・・千鶴丸の死体が漂着した場所。富戸
- * おとどの橘たちばな・・・殺された千鶴丸が両手に握っていた橘の枝を植えた富戸三島神社
- * 馬蹄石・・・頼朝の愛馬「生月」いけづきの蹄跡。赤沢
- * 河津三郎血塚・・・伊東祐親の長男河津三郎が暗殺された所。赤沢
- * 椎木三本しいのき・・・河津三郎暗殺のため刺客が隠れた椎の木。赤沢
- * 相撲モニュメント・・・頼朝を慰める相撲大会開催の場所。奥野ダム

これらの中から今回は『椎木三本』しいのきについて、少し変わった方法で詳しく説明したいと思います。

ちょっと話が横にそれますが、昔（60 年前まで）伊豆急行はなく、伊豆（特に南部）の交通手段は東海バスしかありませんでした。下田を拠点に私の生まれた南伊豆、西伊豆、中伊豆、伊豆東海岸と多くの路線バスが運行されていました。当時バスには運転手の他女

性の車掌さんが乗っていました。切符切り、乗停車案内、清掃、「バックオーライ」「左オーライ」など運転手サポート業務などを担当していました。そして更に、走る道々で近くの名所旧跡をバスの中で時々説明をしてくれました。紺の制服に白い手袋、右手にマイクを持ち、ウグイスの様なきれいな声で歯切れのいい七五調の説明は今でも耳に残っています。高校へ通うバス通学時や下田から国鉄伊東駅までの2時間よく聞くとこでした。この為に車掌さんは入社すると先ず名所案内のセリフを暗記する研修をしたのだそうです。数年前になりますが、昔東海バスに勤めたことのある方からその研修資料の一部を頂きました。伊東の「^{しいのき}椎木三本」のくだりの部分です。

以下、東海バスが下田を出て伊東の赤沢付近に近づいた時の車掌さんの説明です。マニュアル通りのセリフです。文中フリガナ/おくり仮名は原文通りとなっております。

^{しいのき} ＜椎木三本＞

『これから歴史で名高い曾我兄弟仇討の発端地、赤澤山、

^{しいのき}
椎木三本にかかります。

今も尚或は唄にお芝居に孝子の鏡とたとえられ今に

残る曾我兄弟の物語りはこうして伊豆のこの山蔭に

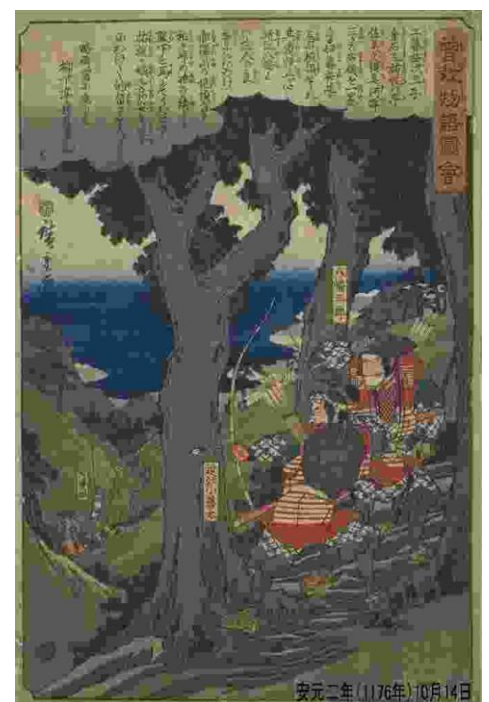
^{うま}
生れたのでございます。

日本三大仇討の一つ、富士の仇討のお話を申し上げます

ますと、安元の昔、伊東の庄、伊東入道祐親は、

此の山向ふの奥野に狩を催し、其の終りに餘興として皆に相撲をとらせま

^{しいのき}
椎木の下で河津三郎を待伏せる刺客



した。其の時、一番人氣を呼びましたのは、祐親の最愛の嫡子、伊豆の國は河津

の庄、十八ヶ村の領主、河津三郎祐泰と、工藤祐經の秘蔵の家来、俣野の

景久との取組でした。お互に親戚関係でありながら領地争ひが基で毎々か

ら恨を抱く祐經は、剛力を誇る景久を出して河津三郎を投げ殺そうとひ

そかにたくらみましたが、剛勇無敵の河津三郎に反って投げ倒されて敗けた
ので御座います。

無念遣るかたなき祐經が、其の儘で納まる筈はありません。力でかなはぬ

なら、暗討ちと、弓矢の名人、八幡の三郎、大見小藤太の二人の家来に言ひ

付け椎木三本の所に待伏せて、河津三郎が意氣揚々と馬にまたがり、丁度此

の谷間にさしかかった時、遠矢にかけて射殺したので御座います。

時は安元二年十月十四日で御座いました。

此の時父を討たれ、河津の館を追はれた河津三郎の遺兒一万、箱王の

二人は母に伴はれ下曾我、曾我太郎の下に逃れ、後元服して曾我五郎、十
郎となりました。

星霜移つて建久四年五月廿八日、頼朝公富士の巻狩の時、十八年の天津風、

不俱戴天の父の仇、討つは今宵と心を併せ、折りしも降りしく五月雨の、黒白

も判ぬ宵暗に、工藤の陣屋に忍び入り、首尾よくその恨を晴らしたので
御座います。

是が、伊豆のこの山蔭に因を發し、今も尚、或は唄に、或は歌舞伎の舞台に

あっぱ ^{かがみ}
天晴れ日本一、孝子の鑑と傳へられる、曾我物語で御座います。

^{こかげ} ^{ちづか}
あの松の木陰に河津三郎の血塚が御座います。

^{しひのき}
又、此の上が椎木三本で御座いまして、昔は三本に分れて居りましたが、今は枯れて、一本しか残つて居りません。

ご清聴ありがとうございました。

これよりバスは海岸沿いに富戸、川奈を経て伊東駅に向かいまーす』



お正月料理



会員 曾我 廣子

コロナ騒動のせいか、今年も何だかお正月という気分にはなれないまま、もう 1 月も終わろうとしています。NLに何かいい題材はないかなあと思いながら、せめて、このお休み続きにお掃除でも、とりあえず、本の整理にとりかかったところ、ふと目に留まりました「英語でつくる和食」。そうだ！まだ 1 月、おせちの話でもと。この本からの抜粋ですが、外国の人に説明するときなどにどうでしょうか？

おせちとは？ 重箱（最近は重箱とはかぎりませんが・・・）に詰められたふだん食べられないような豪華な料理です。「今年の食事が豊かになりますように」という願いをはじめ、それぞれの食材には、様々な意味合いや、縁起がかつがれています。

Gorgeous *Osechi* (New Year's meal) packed in tiered food boxes is delicious and never eaten at any other time. The food and the ingredients used in *Osechi* have their

own meaning and good-luck talismans, and a wish that ‘all meals be rich this year.’

そもそもおせちは、平安時代の貴族たちが、年の初めや桃の節句、端午の節句、などの五節供に、神前にお供え物をして、邪鬼を祓い、そのお下がりをいただき神の恩恵にあやかったといわれている。このとき出されていた料理が「お節供（おせちく）料理」とよばれ、これが、現在のおせち料理のもとになったといわれています。この時期の神は大きな音や火が苦手といわれており、正月には極力音をださないように、火を使わないようにと正月の前に、保存のきく料理を作り、重箱に詰めていたといわれています。また、いつも料理を作っている女性が、正月にはゆっくりできるようにとの考え方もあります。

In the Heian Ara, the aristocrats offered foods on the altar in the Five Seasonable Festivals (New Year, *Momo-no-Sekku*, *Tango-no-Sekku*, so on) to ward off evil spirits. They ate the foods after the festival to take advantage of the benefits of the god. The dishes served at this time were *Osechiku-ryori*, which is the origin of the present -day *Osechi-ryouri*. Gods at this time were afraid of loud sounds and fire. People prepared preserved foods and put them in tiered food boxes before the New Years arrived so that they did not have to use the kitchen, where fire and sounds are inevitably made, during the New Year’s Days. Another possible reason is that women, who were busy making dishes every day, could rest comfortably during the New Year’s Days without preparing food for the family.



基本的なおせち料理は、お屠蘇、祝い肴三種（三つ肴）、雑煮、煮しめになり、祝い肴三種と煮しめは重箱につめられた。なぜ重箱に詰めるかといえば、めでたさを重ねるからきている。祝い肴三種は、関東では田作り（ごまめ）、数の子、黒豆；関西では、たたきごぼう、数

の子、黒豆が基本。「英語でつくる和食」（ナヴィインターナショナル）より引用

寅年について



会員 小西 恒男

1) はじめに

2022年は12支で表わすと3番目の「寅」年である。12支は1年を12か月に分け、各月を表すために付けられた呼称である。

干支（えと）という言葉が使われるが、狭義では12支を云うが、正式には10干12支の略である。

干支の起源はBC4世紀ごろ中国で始まり、主に紀年法（年代の表示）として使用されてきた。即ち10干と12支を並べ、1サイクル60通りの組み合わせで年代を表記することが出来る。人が生まれて60年経過すると元に戻り、これが還暦の祝いとなる。

10干とは1か月30日を10日の3サイクルと考え、10を単位とする。これが10干である。

10干は陰陽五行説に基づいている。即ち自然界の構成を木、火、土、金、水の5要素で表わし、各要素に兄（え）と弟（と）を持ち、10の漢字を宛て次のように呼ぶ。

甲（きのえ）乙（きのと） 丙（ひのえ）丁（ひのと） 戊（つちのえ）己（つちのと）

庚（かのえ）辛（かのと） 壬（みずのえ）癸（みずのと）

2022年は10干では9番目の壬（みずのえ）にあたり、干支は壬寅（みずのえとら、音読みでじんいん）となる。

一方、寅を時間と方角で表わすこともある。時間では午前4時、方角で言うと東北東を表わす。

以下トラについていくつかの知見を述べてみる。

2) トラに関すること

① 虎の生息地

虎はシベリア、中国東北部、朝鮮、東南アジア、などに生息している。肝心なのは日本には生息していない、ということである。古代から日本人にとって虎は抽象的なもので虎の明確なイメージを持った人はいなかったということである。

② 虎の起源

ギリシャ神話に虎が登場する。全知全能の神ゼウスが虎を遣わせて 2 輪戦車をひかせ、河を渡る話がある。ギリシャ語で虎は「ティグリス」という。世界の 4 大文明のひとつがメソポタミア文明である。ご存じのように 4 大文明はすべて河の流域で発展しており、メソポタミア文明はティグリス・ユーフラティスが河の名前である。

虎のひく 2 輪戦車はこのティグリス河を渡ったと推測される。(メソポタミア文明は現在のイラク、シリア北東部、トルコ南東部の地域という)

ギリシャ語のこの「ティグリス」が英語とドイツ語の " t i g e r " の語源と言われている。

③ 日本の虎伝説

奈良県明日香村にある高松塚古墳(別名キトラ古墳)は 7 世紀ごろの古墳である。この壁の 4 面に 4 体の動物が神様の姿として彩色豊かに描かれており、西壁に描かれているのが「白虎」である。この頃の白虎は日本人にとって大陸から渡来した神秘的で恐ろしい神の姿と映っていたのであろう。

虎が動物として認識されるようになったのは加藤清正の有名な虎退治からではなかろうか。

1597 年、秀吉の朝鮮出兵で朝鮮に渡った清正は不幸にも可愛がっていた小姓と愛馬を虎に殺されたため、仇討に虎を退治したとの伝説が伝わっている。



「伊豆アニマルキングダム」(動物園)の
ホワイトタイガー親子(東伊豆町稲取)

3) ISGG 活動について 「芸者とお座敷遊び体験」同行記

ニュースレター原稿を書いているうちに虎に関する懐かしい思い出が浮かんできた。
もう 15 年以上昔の話である。

伊東観光協会から ISGG に対して欧米のメディア関係者(男女 15 名位)を招いて「芸者遊び体験」をするので同行通訳をして欲しいとの依頼があり(場所は伊東市の文化施設・東海館)、ISGG から私を含む 2 名の参加だったと思う(残念ながらもう一人が誰であったか記憶にない)。夕食を取りながらいくつかの芸者とお客のゲーム(遊び)をしながら 3 時間ほど費やしたことを覚えている。

その中に虎をテーマとした遊びがあった。近松門左衛門の「国姓爺合戦」をテーマにした遊びである。舞台の真ん中に屏風を置き、芸者と客の 2 名が武士、虎、武士の母親(老婆)のいずれかの姿に扮して勝負をするものである。ルールは、-武士は虎に勝ち、老婆に負ける。老婆は武士に勝ち、虎に負ける 虎は老婆に勝ち、武士に負ける のである。

三味線を持った芸者(裏方)が独特の節回しで口上を述べ、最後に「トラ、トラ、トラトラ」の掛け声で 2 人が屏風から姿を現わし、勝ち負けを決めるものである。負けた人は罰としてお酒を飲むという他愛のないものであるが、お座敷全体が大変盛り上がり、私にとって全く初めてで大変粋な体験(見学)をすることが出来た。

余談を云うと、外人グループの中に associated press の日本人記者(男性)がいて、芸者遊びを良く知っており、彼がしっかりと英語でサポート役を務めてくれ、筆者は余り

貢献出来なかったことを良く覚えている。

4) 虎に関する格言、慣用句

虎に関する格言、慣用句は日常比較的良く使われている。いくつか紹介しよう。

①トラの子 (treasure)、トラの巻 (bible) 大事なもの、貴重なものとして日常生活で良く使用される

②張り子のトラ (paper-tiger) 外見は強そうだが、実は弱く虚勢を張る、見掛け倒しの人をいう

③トラの威を借る狐 力のない者が強い者の権威を頼って威張る様をいう

④虎視眈々 (watch vigilantly for a chance) じっと機会を狙いスキがあればつけ入ろうと伺う様

⑤虎穴に入らずんば虎児を得ず (Nothing venture, nothing gain.) 敢えて身の危険を冒さなければ大きな成果は挙げられないことのたとえ

⑥人は猫にもなれば虎にもなる 相手や状況次第でおとなしくもなれば狂暴にもなることのたとえ

⑦三人虎をなす 市中に虎が現れたという誰かの噂を信じる人はいないが、3人が同じことを触れ回ると噂も本当になってしまうという流言飛語の恐ろしさを表わす言葉である。近年SNSなどで他人を傷つけてしまう現象が多く見られる。自分への戒めとして留意すべき言葉である

5) 壬寅（みづのえとら）年の歴史

60年周期で訪れる壬寅に起こった過去の歴史について調べてみた。壬寅の年は大きな社会変化は見られず、比較的穏やかな1年であったといえる。

① 1182年（840年前） 伊東中興の祖として知られる伊東祐親が自害した年源氏との

戦いに行く前に捉えられ、娘婿である三浦義澄の館に幽閉されていた。この年、頼朝の妻、北条政子が懐妊したことから頼朝の恩赦で自由の身になったことを知った祐親は平家武士の恥として切腹、自害した

②1422 年(600 年前) 宇佐美山田の地に日朝上人が誕生した。後に日蓮宗身延山第 11 世慣主になった人である。

③1542 年(480 年前) 徳川家康が生まれた年である。生まれた時間が寅の刻(午前 4 時頃)とも言われている。徳川幕府 260 年の基礎を作った将軍である

④1902 年(120 年前) 明治 35 年、桂内閣とイギリスの間で軍事同盟を結ぶいわゆる「日英同盟」である。ロシアの領土拡大を恐れた両国の利害が一致したための同盟であった

⑤1962 年(60 年前) 昭和 37 年、伊東では湯川横磯に伊東水族館が完成した。また、伊東市長選挙で沼田元弑氏が再選された。伊東スカイラインが開通した年でもあった
壬寅の年は厳しい冬を超えて芽吹き始め、新しい成長の礎になる年と言われている。過去の歴史の推移から見て、2022 年は大きな変革のない年になると予想される。実際に予想通りの平穏な 1 年になることを切に望みたい。

昔のこと



会員 石田泰嗣

この頃歳のせいか 子供のころのことを思い起こすことが多くなっている。 私が小学生のころ；つまり昭和 20 年代のことだが 今の「岡橋」のあたりは 田圃であった。 そこから「競輪場」のあたりまでは一面の田圃で、 一つの例外が「三島進学ゼミナール」の

あたりにあった「森脇別荘」である。 森脇マサミツという所有者の名前を覚えている。
私が水泳を覚えたのは「ホテル岡部」のまへの松川に石を積んで流れをせき止めて 簡易
プールを作った場所で、 1～3 歳上の年長者が教えてくれた。 時には 赤淵（青葉台入
り口；今は、深さはないが当時は松川で一番深いところで2メートルぐらいだったと思う）
まで出かけて岩の上から飛び込みをしたこともある。 また箱メガネを使って モリで「ど
うりん」「すいっつき」「かんじっこ」と呼んでいる川魚や「おつの」と呼ぶ手長エビなど
を採って 焚火で焼いて食べた思い出もある。 ウナギやドジョウをとったこともある。
あと岡橋の近くには夏の夕方になると「おとう」と「めい」というトンボが何十、何百と
集まってくる。 ときには竹竿の先に 「もち」をつけてトンボとりもしたことがある。
トンボは絶滅したとしても 川魚はどうなっているのか気にはなるが あれ以来 川に入
ったことはない。

【事務局便り】

相変わらずのコロナ禍、残念ですが With Corona で身近で小さくてもちょっと気になる
ものとか面白いことを考えて過ごしたいですね。 私はNFLのプレイオフ全試合見てい
ます。 又、YouTube でアンドレア ボチェッリの動画、40回位見ました。
さて、当会の活動ですが、12月は通常のイチゴサロン、土曜会そして通常の英語サロンに
代わり ALT3名を招待しての忘年会を開催しました。 1月は第1回英語講演会を含め
すべての活動を中止します。 早くコロナ禍が収束することを願っております。



忘年会にて



英語サロン風景

【編集後記】

Newsletter は、コロナにも負けず、今年も稲葉会長の年頭のご挨拶で元気にスタートいたしました。メデタシ、メデタシと言ったところです。

そして会長の青春時代のスイス旅行記、特に美味しそうなチーズとパンのお話は、楽しく読ませていただきました。沢山のチーズのお土産、羨ましい！

続いて、菊池さんによる「鎌倉殿とわが町伊東」、詳しい伊東氏・北条氏関係図まで添えてあり、大河ドラマが、ますます楽しめようと言うもの。

〈椎木三本〉も、バスガイドさんの名調子が耳元に聞こえて来るようです。

曾我さんのお正月料理のお話、謹んで拝読。「おせち料理」と言えば日本酒しか頭に浮かばない私は、考えを新たにさせられました。

小西さんの「寅年について」の数多くの話題、有難うございます。

余談ながら、tigre (tiger) はもともと「矢」だそうで、「矢のように速い川」がティグリス川、「矢のように速い動物」が、Tiger なのだそうです。今なら、もっと速いのはチーターとかピューマと思うのですが。今年、私は、大トラにならないように気をつけます。トラぬ狸の皮算用…。ちょっと違うか。

石田さん、懐かしい伊東の風景。昔をご存知の方から見れば、さぞ変わった事でしょう。

また折を見て自然が豊かだった伊東の事をお聞かせください。

皆さんご寄稿有難うございました。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

T.K 記 (tea & cake)

伊東市善意通訳の会 (ISGG)

会長 稲葉 尚子

(事務局) 413-0232

伊東市八幡野 1324-40 主原 一雄

e-mail : larryn@estate.ocn.ne.jp

<http://itosgg.info/>

(編集委員) 稲葉尚子、曾我廣子、加藤達雄